

「令和の日本型学校教育 千葉市型」の構築を目指して

—自立した学習者を育てるための六つのアプローチから—

1 はじめに

本センターでは、昨年度より「自立した学習者」を育成していくためにはどのようなカリキュラムを構成・実施すればよいのかを明確にし、これを「令和の日本型学校教育 千葉市型」と定義し研究をしてきた。

本年度は「主体的に学習に取り組む態度の育成」「アクティブ・ラーニングの推進」を通して「令和の日本型学校教育」で述べられている「自立した学習者」の育成に焦点を当てることで教育の質を高め、特色ある「千葉市型」を構築しようと研究に取り組んだ。それは、「授業で勝負」を志向する本市において、経験年数の少ない教員が増える中、授業の質を高めていくことが喫緊の課題だからである。「自立した学習者」の育成を目指すことは、この課題を解決していく上で実効性のある極めて有効な手段であると考えた。

2 「自立した学習者」は育成されているのか

本研究における「自立した学習者」の具体的な姿は以下の4点である（〔資料1〕）。

- (1) わかるために自分で計画を立て、学びを進める
- (2) 自分が何がわかって何がわからないかがわかる
- (3) 粘り強く学習に取り組む（主体性をもち続ける）
- (4) 他の人と議論し、自分の意見と比較して、よさを取り入れることができる

〔資料1〕「自立した学習者」の具体的な姿

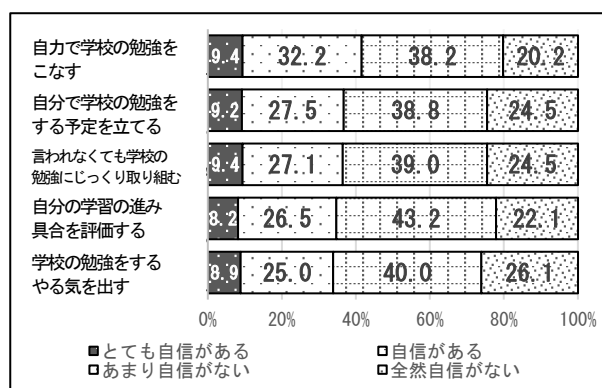
本研究をはじめて1年が経過するが、「自立した学習者」は果たして育成されているのだろうか。二つの調査結果から探ってみた。

(1) PISA2022の結果から

昨年12月に発表されたPISA2022の結果を見ると、日本は3分野（数学的リテラシー、読解力、科学的リテラシー）全てにおいて前回の調査よりも平均点が上昇し、5位（数学的リテラシー）、3位（読解力）、2位（科学的リテラシー）と、世界トップレベルであった。報告によると「学校現場において現行の学習指導要領を踏まえた授業改善が進んだこと」が一つの要

因として挙げられているが、果たして「自立した学習者」育成の成果は現れているのだろうか。

このことは「自律学習と自己効力感」に係る生徒質問調査から見て取ることができる。「問 61 学校が再び休校になった場合に自律学習を行う自信があるか」という質問に対し、「自信がない」と回答した生徒が非常に多く、OECD加盟国37か国の平均値を大きく下回り、34位という結果となった（〔図1〕）。



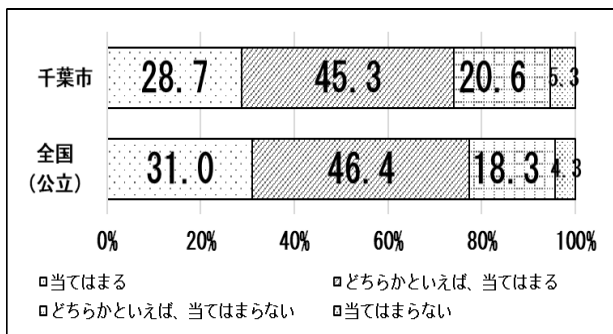
〔図1〕「自律学習と自己効力感」に関する質問の回答

報告書では、「感染症の流行・災害の発生といった非常時のみならず、変化の激しい社会を生きる子供たちが普段から自律的に学んでいくことができるような経験を重ねることは重要であり、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の推進により、自ら思考し、判断・表現する機会を充実したり、児童生徒一人一人の学習進度や興味・関心等に応じて教材や学ぶ方法等を選択できるような環境を整えたりするなど、自立した学習者の育成に向けた取組を進めていく必要がある。」と述べている。

(2) 令和5年度全国学力・学習状況調査の結果から

さらに昨年4月に実施された全国学力・学習状況調査の本市における結果を見ると、小学校中学校共に全国平均正答率（国語と算数・数学の合計）を上回った学校と下回った学校はほぼ同数であり、学力向上への課題は解決していない。質問紙調査に至っては「分かった点やよく分からなかった点を見直し、次の学習に

つなげることができているか」の質問に対し「当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、全国平均より3.4ポイント低い状況であった（〔図2〕）。



〔図2〕 令和5年度全国学力・学習状況調査」の小学生の回答以上二つの調査結果から、「自立した学習者」の育成は本市でもまだ十分実現しておらず、本センターの研究はまさに時代の要請にかなったものであると考えている。

3 「自立した学習者」を育成するためには

〔図1〕〔図2〕の結果を見る限り、コロナ禍を経てもなお、全国及び本市における課題は大きいと考える。では、自立した学習者を育成するためには、具体的にどのようにすればよいのだろうか。

〔資料1〕で示した具体的な姿は、学習課題に対し「学習動機」「メタ認知」「学習方略」の三つを能動的に機能させることができる子供の姿であると言える（自己調整学習 self-regulated learning、Zimmerman, B. J. (1989)）。

このような学習者を育成していくためには、教員の授業に対する大きな意識改革が必要である。これまでの「コンテンツベース」の授業から「コンピテンシーベース」の授業に転換していくことである。つまり学習指導要領の趣旨にある教科等横断的、汎用的な資質・能力の育成に重点を置くことだと言える。

そのために、各教科等において、どのような資質・能力をどのような単元・題材で育成できるのかを意図的・計画的に考えることが求められる。つまり昨年度のまとめにおいて、六つの研究を一体的に考える中で実感した、カリキュラム・マネジメントの適切な実践

を行うということである。この能力は、教員の資質向上を図ることにもつながると考えている。

4 研究の目的

「自立した学習者」を育成していくために必要な具体的な方策を示せるよう、六つの研究テーマについて、継続して研究を行うとともに、これらの研究を有機的に構造化し実効性を高める。

5 研究の方法

目指すべき子供の姿を具体的に描きながら、昨年度六つの研究から得られた成果に対する検証を行うとともに、研究を進めていく中で生じた疑問を解決していくことにより、「自立した学習者」を育成していくためには何をどのようにしていけばよいかを探っていく。得られた結果を基に、本市教職員の行動指針を示すことで「令和の日本型学校教育 千葉市型」の実現に迫る。本年度の研究は以下のとおりである。

(1) 学習者に直接関わる視点

①授業改善に関する研究

これまでの教師主導の授業を見直した、子供主体の授業の在り方を明らかにする。

②ICT活用に関する研究

1人1台端末タブレットPCの主体的な活用の在り方を明らかにする。

③デジタル・シティズンシップ教育に関する研究

デジタル・シティズンシップ教育の六つの領域の指導事例の開発とその実践効果を検証する。

(2) 授業を支える教職員や教育課程の視点

④教育相談に関する研究

子供や教員を「支援の輪」に入れるためのツールやシステムについての具体的方策を探る。

⑤教職員研修に関する研究

教職員の学びのマネジメント力育成のために開発したプログラムの効果を検証する。

⑥カリキュラム・マネジメントに関する研究

特色あるカリキュラム・マネジメント推進の効果とその実効性を高めるための方策を探る。

「令和の日本型学校教育 千葉市型」

六つの研究の構造



千葉市で目指す子供の姿 自立した学習者



授業からのアプローチ

見通し・振り返り・自己調整

1 授業改善に関する研究

自立した学習者の育成を目指す
学びの在り方



効果的な指導事例の開発

効果的な活用→主体的な活用

2 ICT活用に関する研究

主体的なICT活用による自立した
学習者を育成するための方策

3 デジタル・シティズン シップ教育に関する研究

デジタル社会において、自ら
判断し、行動する子供の育成



授業を支える教職員・教育課程からのアプローチ

アセスメントシート
・マイクロミーティング

4 教育相談に関する研究

子供や教員を「支援の輪」に入
れるための教育相談の在り方



研修観の転換と
セルフマネジメント

意識

5 教職員研修に関する研究

教職員の資質能力の向上と
学びのマネジメント力の育成



6 カリキュラム・マネジメントに関する研究

資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメント
はどうあるべきか

資質・能力の育成の理解 × 教育活動（授業）の質の向上

